

貝原益軒没後 300 年・亀井南冥没後 200 年記念

益軒・南冥と筑前の学者たち

平成26年12月9日(火)～平成27年1月18日(日)

特別展示室 B



貝原益軒『大和本草』

はじめに

黒田孝高(官兵衛・如水)の子・長政を初代藩主として、二六〇年余りにわたって黒田氏が統治した福岡藩は数多くの優れた学者を輩出しています。

その中でも最も著名な人物は貝原益軒(一六三〇～一七一四)と言えるでしょう。益軒は儒学者として活動する一方で、『黒田家譜』、『大和本草』、『養生訓』といった様々な分野の著作を残し、後世のあらゆる学問に大きな影響を与えました。

また、もう一人、江戸時代後期の儒学者・亀井南冥(一七四三～一八一四)も忘れられるわけにはいきません。南冥は志賀島から発見された金印を鑑定し、その存在を広く世に知らしめたこと、藩の学問所「甘棠館」の祭酒(館長)として、身分の隔てなく、多くの子弟を育成したことなど、その豪放磊落な人柄とあいまって人々の記憶に残る活躍をしました。

奇しくも今年(平成二六・二〇一四年)は両者が亡くなってそれぞれ三〇〇年と二〇〇年という節目の年にあたっていきます。そこで、当館では両者の偉大な足跡と福岡藩で活躍した様々な学者たちの活動を紹介する展覧会を企画しました。

一、福岡藩で学ぶということ

福岡藩は北部九州に位置する筑前国のほぼ一国を範囲として、城下町福岡を中心に黒田氏が統治していた領国です。この藩の特徴は、①外様大名(関ヶ原の戦い前後に徳川家に従った大名)で石高が

大きい(約五〇万石)、②江戸時代を通じて国替えが無い(同じ藩主、同じ所領)、

③大都市である江戸・大坂・京都から遠い、④朝鮮からの外交使節である「朝鮮通信使」の接待、幕府から命じられた長崎の警備、沿岸に現れる密貿易船への対応等、外国を身近に感じる環境にあったこと等があげられます。つまり、大都市からの影響を受けにくい場所にあつて、比較的大きな城下町を中心に安定した領内統治が行われ、さらに外国の情報が入って来やすいということが福岡藩で学問をする際の前提条件といえるものでした。

人口については、福岡藩全体では武士が六〇〇〇人余り、庶民が三〇万人弱(一七世紀末)を数え、その内五万人前後が福岡城下で暮らしていました。したがって、福岡藩の学問は城下町・福岡を中心として、当初は武士によって担われていました。しかし、一九世紀に入ると各地に読み・書き・そろばんを学ぶ寺子屋が数多く開設されるようになり(江戸時代を通じて二四三校)、桜井神社(糸島市)や櫛田神社(福岡市博多区)に今でもいう図書館のような施設も作られ、庶民の学問活動も福岡藩全域で活発になっていきました。

他の地域と比べた場合の学問の質という部分は評価が難しいところですが、地理的・政治的条件は他の地域にはない独自のものがあつたといえるでしょう。

二、貝原益軒と一七～一八世紀の学問

江戸時代は、古代中国の思想家・孔子

が唱えた儒教を研究する学問、すなわち

儒学が盛んな時代でした。とりわけ儒学の中でも朱子学と呼ばれる学問は身分秩序を重んじる江戸幕府の考えと一致して隆盛を極めました。江戸時代の初めに福岡藩士の家に生まれた益軒も当初は朱子学を学んでいましたが、徐々にその活躍の場を広げていき、歴史学・医学・本草学・日本学(国学)といった分野の研究も行つて、その名声を高めていきました。益軒が活躍できたのは三代藩主光之が文治主義的な政治を行ったからと言えます。三代将軍徳川家光までは武力で物事を解決しようとする武断主義的な政治が行われていましたが、四代将軍の家綱以降は儒教的な価値観を重んじるようになり、文官が活躍しやすい時代状況が生まれていきました。

益軒の具体的な活動については表1の略年譜に譲りますが、その学問は先導的かつ普遍的なものであり、また、「民生日用」という言葉で表されるように、実際の生活の役に立つことが重視されました。

この時代には他に、出版物としては日本最古の農書である『農業全書』を著した宮崎安貞や、千利休の茶の湯の思想を伝える茶書『南方録』をまとめた立花実山ら著名な学者・文化人が活躍しています。彼らの多くは益軒と交流がありました。一七世紀中期～一八世紀前期の福岡藩の学問はまさに益軒を中心に回つていたといえます。

表1 貝原益軒略年譜

藩主	和暦	西暦	年令	出来事 ※灰色の部分は藩に仕えていた時期	主な著作
② 忠之	寛永7	1630	1	11月14日、福岡城内で誕生。名は篤信、字は子誠。始め助三郎と称す。	
	寛永8 ～ 正保4	1631 ～ 1647	2 ～ 18	父や兄から儒学や医学を学ぶ。6歳の時に母を失う。博多片原町→穂波郡八木山→福岡新大工町→怡土郡井原村→福岡荒戸新町→薬院→唐人町→荒津山と転居する。	
	慶安元	1648	19	御納戸御召料方として2代藩主忠之に仕える。	
	慶安2	1649	20	忠之の怒りに触れ謁見不能などの処分を受ける。	
	慶安3	1650	21	忠之の怒りに触れ浪人となる。以後7年間余り長崎・江戸・大坂・京都で遊学する。	
③ 光之	明暦元	1655	26	髪を剃って僧体となり柔斎と号す。	
	明暦2	1656	27	3代藩主光之から声がかかり再出仕がかなう。	
	明暦3	1657	28	京都遊学の命が下る。松永尺五・山崎闇齋・木下順庵ら儒学者と交流する。以後6年余り京都で過ごす。	
	万治3	1660	31	江戸に行つて幕府儒学者林鷲峰らと交流する。	
	寛文元	1661	32	京都に行く。農学者宮崎安貞らと交流する。	
	寛文2	1662	33	6年ぶりに帰国。	
	寛文4	1664	35	150石の知行地を与えられる。	
	寛文5	1665	36	京都で儒学者・伊藤仁斎らと交流する。父寛齋没する(69才)。	『易学提要』、『読書順序』
	寛文7	1667	38	京都へ行く。	『止戈編』
	寛文8	1668	39	江崎氏(後の東軒)と結婚する。50石の加増を受け知行200石となる。僧体を改め俗体に戻る。光之から久兵衛の名前を与えられる。	『自警編』、『大学綱領条目統解』、『朱子文範』、『近思録備考』
	寛文9	1669	40	荒津東浜に屋敷を与えられる。	『願誕鈔』、『小学句読備考』
	寛文11	1671	42	京都へ行き、儒学者中村楊齋らと交流。帰国後『黒田家譜』編さんの命を受ける。	
	延宝3	1675	46	江戸で幕府薬園を見学する。	『白鹿洞学規』、『大学経文』
	延宝5	1677	48	領内に漂着した朝鮮人と筆談。	『天神行状』、『正統文章規範余録』など
	延宝6	1678	49	家譜編纂の功績により光之から白銀50両を与えられる。	『黒田家譜』(延宝本)、『和漢名数』、『古今詩選』
	延宝7	1679	50	肥後国の杖立温泉へ行く。	『杖立紀行』、『伊野大神宮縁起』、『初学詩法』、『増福院祭田記』
	延宝8	1680	51	畿内周辺を旅行する。	『畿内吟行』、『京畿紀行』、『大和河内路記』、『本草綱目目録和名』
	天和元	1681	52	老齢により駕籠に乗ることを許される。	『尺素活套』、『君臣系図』など
	天和2	1682	53	藍島で朝鮮通信使を応接する。	『管神故実』、『随生輯要』、『克明抄』、『倭漢筆語唱和』
	天和3	1683	54	江戸からの帰国途中で、伊勢神宮や吉野山などを巡覧する。	『朱子語類選要』、『朱子書節要』、『宋儒文粹』、『二程類語拾遺』
	貞享元	1684	55	幕府から黒田長政の事跡の調査の命が下る。江戸からの帰国途中で関ヶ原や播磨国を調査する。	『黒田先公勲功記』、『大宰府天満宮故実』、『大学新疏』
	貞享2	1685	56	『大日本史』の編さんのために筑前を訪れた水戸藩の儒学者・佐々宗淳に古文書を見せる。	『西帰吟稿』
	貞享4	1687	58	東軒夫人と共に度々病気に悩まされる。	『黒田家譜』(貞享本)、『学則』、『和字家訓』、『吾婦路記』
	元禄元	1688	59	佐賀藩との国境争論の対応を命じられる。家譜改正の功績により白銀50両を与えられる。『筑前国続風土記』編さんの許可が下りる。その後上京し、本草学者・稻生若水や医者黒川道祐らと交流する。	
	④ 綱政	元禄2	1689	60	畿内周辺を旅行する。長兄家時没する(71才)。
元禄3		1690	61	領内各地巡見。藩の算学者・星野実直の講義を聞く。近親者で還暦を祝う。	『香椎宮紀事』、『都鄙行遊記』
元禄4		1691	62	東軒夫人と畿内各地を巡る。	『筑前名寄』、『江東紀行』、『背振山記』
元禄5		1692	63	初めて湯島聖堂へ行き儒学者・林鳳岡と会う。京都で公家と交流。	『続和漢名数』、『壬申紀行』、『大和巡覧記』
元禄6		1693	64	嗣子常春に出仕の命が下る。	『磯光天神縁起』、『講説規戒』
元禄7		1694	65	別府温泉へ行く。徳川光圀よりの依頼で『黒田記略』を編さんする。	『花譜』、『熊野路記』、『豊国紀行』
元禄8		1695	66	辞職を願うも許可されず。次兄存齋没する(74才)。	
元禄9		1696	67	100石加増され知行300石となる。宮崎安貞『農業全書』完成する。	
元禄11		1698	69	常春剃髪して家を出る。甥の重春を新たに養嗣子とする。	
元禄12		1699	70	70才の長寿を祝う。	『和字解』、『日本釈名』、『三礼口訣』
元禄13		1700	71	甥の好古が没する(37才)。辞職を許される。	
元禄14		1701	72	重春の江戸参府に際して『臚行訓語』と題した教訓書を贈る。	『近世武家編年略』、『至要編』、『宗像郡風土記』
元禄15		1702	73	末兄樂軒が没する(78才)。	『音楽記聞』、『扶桑記勝』
元禄16		1703	74	重春、東軒夫人の姪と結婚する。『筑前国続風土記』を4代藩主綱政に献上する。	『筑前国続風土記』、『点例』、『和歌紀聞』、『黒田忠之公譜』、『五倫訓』、『君子訓』
宝永元		1704	75	家譜改訂が済み、光之から賞される。	『黒田家譜』(宝永本)
宝永2		1705	76	重春に女子が生まれたが、夫人は亡くなる。	『古詩断句』、『鄙事記』
宝永3		1706	77	重春、井手氏と再婚する。	『和漢古語』
宝永4		1707	78	この頃から損軒を改めて、益軒と称するようになる。	
宝永5		1708	79	近郊を旅行する。	『大和統訓』
宝永6		1709	80	80歳の長寿を祝う。	『岐蘇路記』、『大和本草』、『篤信一世用財記』
宝永7	1710	81	重春に男子が生まれる。	『岡湊所考』、『楽訓』、『和俗童子訓』	
正徳元	1711	82	門人らが集まり80歳の長寿を祝う。	『岡湊神社縁起』、『有馬名所記』、『五常訓』、『家道訓』	
⑤ 宣政	正徳2	1712	83		『心画軌範』、『自娛集』
	正徳3	1713	84	東軒夫人が没する(62才)。	『養生訓』、『諸州巡覧記』、『日光名勝記』
	正徳4	1714	85	正月から健康を害し、8月27日に没する(85才)。金龍寺に葬る。	『懐思録』、『大疑録』

※本略年譜は益軒会編『益軒全集 巻之一』(益軒全集刊行会、1911年、後に国書刊行会から1973年に復刻)と井上忠『貝原益軒』(吉川弘文館、1963年)に収録された年譜・年表を参考に作成した。

表2 亀井南冥略年譜

藩主	和暦	西暦	年令	出来事 ※灰色の部分は藩に仕えていた時期	主な著作
⑥ 継高	寛保3	1743	1	8月25日、姪浜忘機亭で誕生。	
	寛延3	1750	8	弟の曇栄が生まれる。	
	宝暦6	1756	14	儒学者・荻生徂徠の弟子で漢詩人であった肥前蓮池の僧大潮に会う。	
	宝暦9	1759	17	僧大同と長崎へ行き詩を学ぶ。	『瓊浦草』
	宝暦11	1761	19	永富獨嘯菴(南冥の医術の師)と長崎へ行く。また、熊本へも行く。	
	宝暦12	1762	20	京都で医師・吉益東洞に会う。その後大坂へ行き永富獨嘯菴に弟子入りする。	
	宝暦13	1763	21	藍島で朝鮮通信使を応接し、その様子を『決々余響』にまとめる。父・聴因の還暦を祝う。	『決々余響』
	明和元	1764	22	父に従って福岡・唐人町へ移り、医業を営むかたわら「南冥堂(蜚英館)」という私塾で儒学を教える。	
	明和3	1766	24	永富獨嘯菴が没する(35才)。	
明和5	1768	26	この頃長崎行きカ。		
⑦ 治之	明和7	1770	28	大潮(南冥の師の一人)が没する(93才)。父・聴因が失明する。	『喪明編』
	明和8	1771	29	白石子春ら数名と熊本へ行く。	
	安永元	1772	30	脇山氏と結婚する。この頃長崎行きカ。	
	安永2	1773	31	長男・昱太郎(昭陽)が生まれる。父・聴因の70才の賀宴を開く。	
	安永4	1775	33	門人緒方周蔵を連れて薩摩へ行く(のちに『南遊紀行』としてまとめられる)。次男・昇(大壮・雲来)が生まれる。	
	安永6	1777	35	京都で同門の蘭学者・小石元俊や徳山藩の儒学者・島田藍泉と交流する。三男・大年が生まれる。	『矢音舳』
	安永7	1778	36	7代藩主治之の抜擢により15人扶持を与えられ儒学者兼医者として仕える。『半夜話』を著して藩に献呈する。江上弉州、南冥の門人となる。	『半夜話』、『病因考備考』
	安永8	1779	37	子どもの嘔吐と下痢の対処について考察した医学書『南冥問答』を著す。	『南冥問答』
	安永9	1780	38	父・聴因が没する(77才)。	
⑧ 治高	天明元	1781	39	治之が没する(30才)。『肥後物語』を著して理想的な藩政改革のモデルを熊本藩に求める。	『肥後物語』
	天明2	1782	40	8代藩主治高が没する(29才)。斉隆が6才で9代藩主となる。	
⑨ 斉隆	天明3	1783	41	学問所設立の献策が認められ、年末には甘棠館(西学問所)の棟上げが済む。	
	天明4	1784	42	2月1日、甘棠館落成。南冥は祭酒(館長)となる。2月6日、修猷館が開校する。2月23日に志賀島で金印が発見される。	『金印弁』
	天明5	1785	43	秋月藩9代藩主黒田長舒の元へ昭陽と共に行く。以後毎月講義のため秋月へ行く。	『甘棠館乙巳稿』
	天明7	1787	45	150俵取りに加増される。白鳥(現北九州市若松区)の由来を記した碑を造ろうとするが藩命で中止させられる。	『岡県白鳥碑文』、『素書独断』
	天明8	1788	46	夫人の道徳を説いた中国の古典『女誡』を刊行する。	『女誡』
	寛政元	1789	47	太宰府の顕彰碑を造ろうとするが藩命で中止させられる。	『太宰府旧址碑文』
	寛政2	1790	48	母・徳が没する(77才)。家老・久野外記(南冥の理解者)が没する。	
	寛政3	1791	49	昭陽、島田藍泉に入門し、帰国後『成国治要』を著す。	
	寛政4	1792	50	突如罷免され、他藩の者との交流を禁じられる。家督は昭陽が継ぎ15人扶持を与えられる。	
⑩ 斉清	寛政5	1793	51	『論語』の解釈書である『論語語由』を著す。	『論語語由』
	寛政6	1794	52	『論語語由』の内容を補う『論語語由補遺』を著す。	『論語語由補遺』、『奇観録』
	寛政9	1797	55	豊後日田の商人・広瀬淡窓(16才)が入門する。	
	寛政10	1798	56	甘棠館が火災で焼失し、そのまま廃校となる。昭陽の長女・少葉が生まれる。	『訳琉客談記』
	寛政12	1800	58	唐人町で再び火災があり、南冥一家は草香江(福岡市中央区草香江)に、昭陽一家は百道林(現福岡市早良区百道)に転居する。	
	享和元	1801	59	豊後日出藩の儒学者・帆足万里がやってきて交流する。	
	享和2	1802	60	縁者や門人が6日間にわたって還暦を祝う。	
	文化2	1805	63	昭陽の長男・蓬州が生まれる。仙台藩の蘭方医・大槻玄沢がやってきて交流する。	
	文化3	1806	64	秋月藩の援助を得て『論語語由』が出版される。	
	文化4	1807	65	夫人の脇山氏が没する。	
	文化5	1808	66	昭陽の次男・暘州が生まれる。	
	文化6	1809	67	昭陽、異国船来航を知らせるのろし台の勤番となり、『烽山日記』を著す。	
	文化7	1810	68	生前墓を造る。	
	文化8	1811	69	この頃から精神の変調を来し始める。	
	文化9	1812	70	三男の大年が没する(36才)。	
文化11	1814	72	3月2日、自宅の火災が原因で焼死する。浄満寺に葬る。昭陽は3年間祠堂にこもり喪に服す。		

※本略年譜は吉田洋一「亀井南冥年譜考」(『久留米大学比較文化研究』第42・43号、2009年)を元に、著作類は「古典籍総合目録データベース」(<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>)で年代の分かるものを一部を補って作成した。



甘棠館額 (九州大学附属図書館付設記録資料館所蔵)

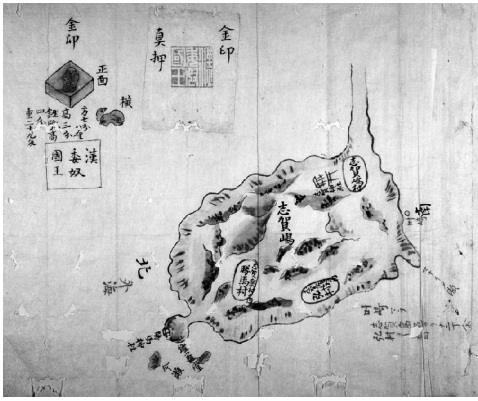


修猷館額 (福岡県立修猷館高等学校所蔵)

三、亀井南冥と一八〇一―一九世紀の学問

福岡藩の学問で益軒の時代のよう大きな動きが出てくるのは一八世紀中期以降です。そのキーマンとなったのが福岡藩の在村医の家に生まれた亀井南冥です。当初、南冥は儒学の中でも「古文辞学」と呼ばれる学問を学んでいました。江戸時代中期に登場したこの学派は、当時の主流であった朱子学を批判して、儒教の古典に立ち戻ることがを重んじ、文献を厳密に読み解くことを主張しました。

福岡城下の唐人町で医業のかたわら儒学を教える私塾を開いていた南冥は三六才の時に七代藩主治之に抜擢されて藩の儒医となります。その後も藩への献策を積極的に行い、登用七年目の天明四（一七八四）年には全国的にも珍しい二つの藩校（朱子学を重んじる東学問所「修猷館」と古文辞学を重んじる西学問所「甘棠館」）が開校し、南冥は甘棠館の祭酒（館長）となりました。志賀島から金印



亀井南冥『金印』

が発見されるのは学問所開校直後のこと、いち早くその価値を見出した南冥の名声は全国にとどろき、人生の絶頂期を迎えました。

しかし、その後記念碑の建立に関わって藩から叱責されたり、母や理解者であった家老が亡くなったり不幸が続ぎ、五〇才の時に館長の職を突然罷免されてしまいます。さらに追い打ちを掛けるように、五六才の時には甘棠館が火災で焼失し、そのまま廃校となってしまいました。

この背景には、朱子学以外を認めない、いわゆる幕府による「寛政異学の禁」の影響があったといわれています。とはいえ、非常に短い期間ではあったものの、二つの学問所が並立していたことは、お互い切磋琢磨し合って成長するという意味で大きな意味があったと言えるでしょう。

晩年の南冥は不遇でしたが、還暦のお祝いには多くの弟子が集い、六日間も宴が開かれたと言います。学者としてもさることながら教育者としての南冥の魅力を物語る興味深いエピソードです。

四、益軒・南冥のDNA

益軒の儒学者としての仕事は愛弟子である竹田春庵に引き継がれ、朱子学を学ぶ東学問所「修猷館」の系統へと繋がっていきます。『黒田家譜』の続編の編さんや家臣の教育は主に竹田家の当主によって担われていきます。また、益軒が行った地誌編さんの仕事も加藤一純や青柳種信といった学者によって継続され、増

補改訂が行われていきました。さらに、本草学・医学・国学といった諸学問も益軒の業績を発展させ、一九世紀には様々な展開を見せていきます。

一方、南冥の仕事は息子の昭陽、孫の賜洲へと受け継がれ、その門下からは蘭学者・青木興勝、国学者・伊藤常足、豊後国日田の教育者・広瀬淡窓と旭壯親子、秋月藩儒・原古処、玄洋社のメンバーを育てた高場乱らそうそうたる人々が巣立っていきました。

やがて、幕末の福岡藩には蘭癖大名とよばれる西洋の学問に通じた藩主が登場してきます。一〇代藩主斉清は本草学・博物学に造詣が深く、植物や鳥類の研究を熱心に行いました。博多の薬種商で薬園奉行となる内海蘭溪に「本草正画譜」と題した精密な図譜を作らせたり、長崎にやってきた医師で博物学者のシーボルトと交流したり、当時の博物学好きの番付では西の大関に格付けされるほど学問に傾倒していました。

続く一一代藩主長溥も先代同様蘭学好きの殿様でした。それもそのはずで、長溥の実父は当代随一の蘭癖大名である鹿兒島藩主の島津重豪でした。長溥は長崎に多くの家臣を留学させて西洋の進んだ学問を学ばせます。そして、城下には精錬所や医学館を設置し、鉱山開発なども積極的に行いました。全てがうまくいったわけではありませんが、この時の経験を元に近代以降に活躍していく人材も少なからずいました。

おわりに

以上、貝原益軒と亀井南冥の活躍を中心に福岡藩の学者について概観しました。ここで紹介できたのは筑前の学者たちのほんの一部です。まだまだその活動が広く知られていない学者も数多く存在しているものと思います。本展の開催により江戸時代の福岡藩の学問の多様性とその魅力が再確認され、また新たな学者が発掘されるきっかけとなれば幸いです。（宮野弘樹）

※本展開催にあたってご協力いただいた方々（敬称略・五十音順）

（団体）

九州大学附属図書館付設記録資料館
公益財団法人亀陽文庫能古博物館
劇団シヨーマンシップ
社団法人玄洋社記念館
福岡県立修猷館高等学校

（個人）

芥川昭 石橋哲夫 上村篤子 内海一雄
大音重哉 奥村侑 貝原信紘 梶嶋政司
菅亨 木下響 柳田正浩 隈篤松
黒田一敬 黒田長高 塚本潔 塚本哲也
立花俊彦 富田博子 中村彰作
植崎恵子 野口文 橋本友美 樋口潤二
星野京子 細木朗子 松村緑 大和英二
吉田洋一 吉留勝一

福岡市博物館 〒八二一四一〇〇〇一

福岡市早良区百道浜三丁目一番一号

電話〇九二・八四五・五〇一一